

陶淵明の和詩について

土屋, 聡
岡山大学 : 教授

<https://doi.org/10.15017/7337155>

出版情報 : 中国文学論集. 53, pp.15-34, 2024-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



陶淵明の和詩について

土 屋 聡

一、陶淵明の和詩に関する研究とその問題点

陶淵明（三六五～四二七）には、詩題に「和」字を冠する詩が六首ある。^①本稿ではこれらの詩を和詩と称し、主たる考察対象とする。

「五月旦作和戴主簿」詩 「和劉柴桑」詩

「和郭主簿」二首其一詩 「和郭主簿」二首其二詩

「歲暮和張常侍」詩 「和胡西曹示顧賊曹」詩

花房英樹『白居易研究』（一九七一年、世界思想社。192頁）に拠れば、和詩とは先行する原詩に基づき、その内容や形式に対応する形で自己表出がなされるものとされている。ただし、陶淵明の和詩は、現存するものとしては最も早期のものに属する。したがって、唐代以降のような唱和のあり方が確立されていたとは限らず、また、交往の場で生まれる種々の贈答詩などとも未分化な状態であって、明確な定義づけは困難であると言わざるを得ない。

『文選』の分類を見ても、「贈答」部に顔延之（三八四～四五六）「和謝監靈運」詩（卷二十六）がある一方で、「雜詩」部にも謝朓（四六四～四九九）「和伏武昌登孫權故城」詩（卷三十）以下五首の和詩が収められており、一定しない。また、『文心雕龍』には音楽や音声の調和（樂府篇・声律篇）に関する記述はあるが、和詩については特に言及されていない。^②

陶淵明の和詩について

しかし、原詩・和詩ともに残っている作品に拠れば、和詩が原詩の構成をトレースする形で製作されたものであることは確認できる。ここでは、謝靈運（三八五～四三三）「還旧園作見顏范二中書」詩（『文選』卷二十五）および顏延之「和謝監靈運」詩（『文選』卷二十六）を見てみよう。

① 隱遁の志と宋高祖に仕えた官歴について 謝詩……第1～24句 顏詩……第1～18句

② 宋文帝の即位と任用されたことへの感謝 謝詩……第25～30句 顏詩……第19～22句

③ 隱遁生活の様子と相手への語りかけ 謝詩……第31～42句 顏詩……第23～34句

細部の相違はあるが、顔詩の全体的な構成は謝詩を踏襲したものであることが判る。陶淵明の場合、原詩が全て散逸しているため未詳であるが、右の顔謝詩の關係に近いものであった可能性は一応想定しておいてよいであろう。和詩の性質について、安藤信廣『陶淵明「形影神三首」の内包する問題——仏教と（贈答詩）——』（『日本中国学会報』第39集、一九八七年十月）では、「五月旦作和戴主簿」詩を取り上げて、その自己表出のありようのために、相手を主体として詠じるはずの贈答詩の枠組みから外れてしまっていることが指摘されている。また、上田武「陶淵明の若き友人たち——その贈答詩の世界——」（『日本中国学会報』第46集、一九九四年十月）においても、陶淵明和詩が通常の贈答詩に見られるような相手への言及に乏しく、もっぱら自己の内面を語るものとなっている、と指摘されている。確かに陶淵明の和詩には、相手のことに全く触れず、ひたすら自己の思いを語る作品が多く、兩氏論文の指摘は充分に首肯されるものである。しかし、そのような自己表出がどのようにして他者とのつながりを生み出すのか、という点については、なお検討の余地があるように思われる。

和詩の詩題に見える原詩作者については、いかなる経歴の人物であるかほぼ未詳であるが、その官名から推測すれば、江州、潯陽郡、柴桑県（いずれも現在の江西省九江市周辺）の官僚であったと考えられる。^③上田氏前掲論文では、このような官僚たちと陶淵明とによる詩の応酬の場が存在した可能性が指摘されている。これを地方文壇と呼ぶのは大げさかもしれないが、彼ら官僚が参加する大小様々な宴席などは、そうした応酬の場であったと想像される。例えば、石川忠久『陶淵明とその時代』^④（一九九四年、研文出版。148～149頁）では、「和劉柴桑」詩について、柴桑県令が開催した宴席での作と推定している。

だとすれば、和詩におけるコミュニケーションのあり方、とりわけ、そこで語られた自己とはいかなるものであったのか、それがどのような形で読む者の心を動かしたのか、という点はより一層の追究が必要であろう。本稿はこの点を説明しようとするものである。

二、和詩に描かれた生活

陶淵明がその生活を題材とした作品としては田園詩が挙げられるが、和詩にも生活を描いた作品が少なくない。そこで、両者を比較することによって、和詩の特徴を考えてみたい。まず田園詩から見てみよう。

- 1 人生歸有道 人生有道に帰するも
- 2 衣食固其端 衣食は固より其の端なり
- 3 孰是都不營 孰^{たれ}か是れ都^{すべ}て営ま^{みづ}ずして
- 4 而以求自安 而も以て自ら安んずるを求めんや
- 5 開春理常業 開春常業を理^{をさ}め
- 6 歲功聊可觀 歲功聊か觀るべし
- 7 晨出肆微勤 晨^{あした}に出でて微勤^{すき}に肆^{ごと}め
- 8 日入負未還 日入りて未^{すき}を負ひて還る
- 9 山中饒霜露 山中霜露饒^{おほ}く
- 10 風氣亦先寒 風氣亦た先に寒^{つめた}し
- 11 田家豈不苦 田家豈に苦しまざらん
- 12 弗獲辭此難 此の難を辭するを獲^えず
- 13 四體誠乃疲 四体誠に乃ち疲るるも
- 14 庶無異患干 庶^{ねが}はくは異患^{をか}の干す無きを

陶淵明の和詩について

- 15 盥濯息簷下 盥濯して簷下に息ひ
16 斗酒散襟顔 斗酒もて襟顔を散ず
17 遙遙沮溺心 遙遙たる沮溺の心
18 千載乃相關 千載乃ち相ひ関す
19 但願常如此 但だ願ふ常に此くの如きを
20 躬耕非所歎 躬耕は歎く所に非ず

〔庚戌歳九月中於西田穫早稻〕詩

この詩は、人が生きてゆく上で欠かせない衣食の問題から詠み起こされる。みづから働かずして安泰な生活など得られるはずがない。春から毎日欠かさず働いて、どうにか秋の收穫が得られるのである。

次いで早朝から日没まで働き、家に帰る途上での感懷が描かれる。それは逃れられない「田家」の「苦」「難」への思いであり、災害や病氣に侵されることのないようにという切実な祈りであった。

その苦悩は後段において癒やされる。家に着いて手足を洗い、軒下で休みながら酒杯を傾ける。そこで古代の隱者長沮・桀溺に思いを馳せ、みづから耕す「躬耕」の生活を受け入れるのである。

この詩においては、生きることと労働とは不可分とされ、しかもその労働は辛苦とされている。また必ずしも労働が報われるとは限らず、「異患」にも脅かされている。しかし、家でのくつろぎという幸福感を味わうことによつて自身の生き方が肯定される。このような構成は、他の田園詩においても共通してみられるものである。このことについては既に論じたことがあるため、ここではこれ以上詳述しない。⁽⁵⁾次に和詩を見てみよう。

- 1 山澤久見招 山沢久しく招かるるに
2 胡事乃躊躇 胡事ぞ乃ち躊躇せる
3 直爲親舊故 直だ親旧の爲の故に
4 未忍言索居 未だ索居を言ふに忍びず
5 良辰入奇懷 良辰奇懷に入り
6 挈杖還西廬 杖を挈へて西廬に還る

7 荒塗無歸人

荒塗婦人無く

8 時時見廢墟

時時廢墟を見る

9 茅茨已就治

茅茨已に治に就き

10 新疇復應畚

新疇復た応に畚すべし

11 谷風轉淒薄

谷風転た淒薄

12 春醪解飢飮

春醪飢飮を解く

13 弱女雖非男

弱女は男に非ずと雖も

14 慰情良勝無

情を慰むるは良に無きに勝れり

15 栖栖世中事

栖栖たり世中の事

16 歲月共相疎

歲月共に相ひ疎なり

17 耕織稱其用

耕織其の用に称ふ

18 過此奚所須

此れを過ぎては奚の須つ所ぞ

19 去去百年外

去り去りて百年の外

20 身名同翳如

身名共に翳如たらん

(「和劉柴桑」詩)

冒頭は詩題に言う「劉柴桑」なる人物の招きに応じて「西廬」に転居した経緯が述べられる。「西廬」は旧居であつたが放置されていたものらしく、茅葺き屋根の修理や周辺の田畑を開墾し直すことが述べられる。春の風はまだ冷たく、酒によつて飢えや疲れを癒やす。また、愛娘によつて精神的にも癒やされる日常が描かれる。

このような生活をおくることによつて俗世のことは年月とともに遠いものとなつてしまい、今はただ、つましいながら満ち足りた生活を送ろう、いつか自分が死んだ後にはこの肉体も名譽も消え失せるであろう、と結ばれる。

以上のように、「和劉柴桑」詩では田園詩のような農耕生活の不安や苦悩は描かれない。第12句「飢飮」という語句に、生活の苦しさが表れているようにも思われるが、しかし、田園詩のように労働に励まなければならぬという方向に展開するわけではない。代わりに何が描かれるかと言えば、それは豊かで平穩な生活によつて得られる精

神の安定である。このことは「和劉柴桑」詩のみではなく、他の和詩においても同様のことが言える。

- 1 藹藹堂前林 藹藹たり堂前の林
- 2 中夏貯清陰 中夏 清陰を貯ふ
- 3 凱風因時來 凱風時に因りて来たり
- 4 回飈開我襟 回飈我が襟を開く
- 5 息交遊閒臥 交りを息めて遊に閒臥し
- 6 坐起弄書琴 坐起に書琴を弄ぶ
- 7 園蔬有餘滋 園蔬餘滋有り
- 8 舊穀猶儲今 旧穀猶ほ今に儲ふ
- 9 營己良有極 己れを営むは良に極り有り
- 10 過足非所飲 足るに過ぐるは飲むる所に非ず
- 11 春秫作美酒 秫を春きて美酒を作り
- 12 酒熟吾自斟 酒熟して吾れ自ら斟む
- 13 弱子戲我側 弱子我が側に戯れ
- 14 學語未成音 語を學びて未だ音を成さず
- 15 此事真復樂 此の事真に復た樂し
- 16 聊用忘華簪 聊か用て華簪を忘る
- 17 遙遙望白雲 遙遙として白雲を望み
- 18 懷古一何深 古を懷ふこと一に何ぞ深き

（「和郭主簿」二首其一詩）

庭の木々は真夏にも涼しい木陰を作り、南風が襟元に吹いてくる。俗世との交わりをやめて書や琴を楽しむ生活を送る。菜園にはありあまる野菜、去年の穀物は今でも貯えられている。暮らしを営むには上限があるものであり、必要以上は望まない。酒を飲むかたわらで子どもが遊び、片言でおしゃべりをしている。このような生活こそがま

ことに楽しいものであり、官僚の世界のことなど忘れてしまふ、と安寧な日々への満足が述べられている。

- 1 虚舟縦逸棹 ほしいます 縦にし
- 2 回復遂無窮 きはま 回復遂に窮り無し
- 3 發歲始俛仰 発歲始めて俛仰し
- 4 星紀奄將中 星紀 奄ち將に中ばならんとす
- 5 明兩萃時物 明兩 時物に萃まり
- 6 北林榮且豐 北林 榮え且つ豊かなり
- 7 神淵寫時雨 神淵 時雨を寫す
- 8 晨色奏景風 晨色 景風を奏す
- 9 既來孰不去 既に來たる孰か去らざらん
- 10 人理固有終 人理 固より終はり有り
- 11 居常待其盡 常に居て其の尽くるを待ち
- 12 曲肱豈傷沖 肱を曲げて豈に沖を傷らんや
- 13 遷化或夷險 あるい 遷化 或は夷險あるも
- 14 肆志無窟隆 ほしいます 志を肆にして窟隆無し
- 15 即事如已高 即事 如し已に高くんば
- 16 何必升華嵩 何ぞ必ずしも華嵩に升らん

（「五月旦作和戴主簿」詩）

無人の舟が気ままにどこまでも流れてゆくように、歲月も年が明けたと思っているうちにいつのまにか夏となっている。太陽が草木を照らし、北の林も豊かに茂っている。おりよく雲から雨がふりそそぎ、明け方に南風が吹く。生命の輝きに満ちた心地よい夏の朝である。その景色を眺めながら、作者は避けられない人生の終わりに思いを馳せる。この世界に來た者はやがて去りゆく。しかし、彼はその厳しい現実に対しても、心を平靜に保つことを述べている。人間には良いときも悪いときもあるが気ままに過ぐせば動揺することもない、と。

これらの詩と田園詩とを比較してみれば、和詩がもつぱら隱遁生活の楽しく心穏やかな日々を描くものであったことは明らかである。それでは、なぜ和詩においては生活の不安や苦悩が描かれなないのであるか。最も考えられることは、そもそも原詩が隱遁生活を礼賛するものであり、そのネガティブな側面に着目するようなものではなかった、という可能性である。もちろん原詩が残っていない以上、推測の域を出ないのであるが、原詩をトレースする顏延之「和謝監靈運」詩の例を考えれば充分にあり得ることである。さらに言えば、当時の隱遁を尊ぶ風潮もこの可能性を補強するであろう。王瑤「論希企隱逸之風」(『中古文学史論集』一九五六年、上海古典文学出版社。66頁)では、西晋の太康文学以降、隱遁生活に対して「崇高かつ快適で、羨望に値するもの」とする見方がなされてきたことが指摘されている。そのような風潮が世を覆っていたとすれば、原詩作者たちも当然その影響下にあったと考えられる。その場合、「生きるために何を為すべきか」という思索よりも隱遁生活の楽しさや充実ぶりを直截に述べるのが優先されたであろう。換言するならば、あえて生活の不安や苦悩を書かないということが、陶淵明のコミュニケーションの取り方であったとも考えられるのである。

というのも、楽しく充実した隱遁生活が官僚たちの興味を惹き、その楽しみを共有することによって陶淵明と官僚たちが結びつけられていたことが、次のような贈答詩から裏づけられるためである。

「答龐參軍」詩(四言)では、琴書を楽しみ、菜園を耕す生活が第一章に詠じられているが、第二章では「同好有らずんば、云胡んぞ以て親しまん(不有同好、云胡以親)」と述べられており、龐參軍を隱遁に関心を寄せる「同好」の仲間としていることが判る。

また、同人物に贈った「答龐參軍」詩(五言)においても、「客有り我が趣を賞し、毎毎林園を顧みる(有客賞我趣、毎毎顧林園)」と、龐參軍が陶淵明の趣味嗜好を賞賛し、常に訪問していたことが述べられている。

さらに、「与殷晋安別」詩では、「去歲南里に家し、薄か少時の鄰と作る。杖を負ひて游従を肆にし、淹留して宵晨を忘る(去歲家南里、薄作少時鄰。負杖肆游従、淹留忘宵晨)」とあり、近所に住んだことがきっかけとなつて、昼夜を忘れて遊んだことが回想されている。これもまた、隱遁している陶淵明と官僚である殷晋安(名は景仁。三九〇?〜四四〇?)とが楽しみを共有していたことを意味している。

以上に見てきたことからすれば、陶淵明の和詩は隱遁を尊ぶ風潮に協調的に制作されたものと考えられる。しかし、そのみでは彼の特色を解明したことにはならない。そこで、次にその独自性について検討したい。

三、有限の生活・有限の自己

王瑤氏論文に指摘されているように、太康期には穏やかで満ち足りた理想的隱遁生活を描く作品が少なくない。一方、陶淵明の和詩も円満な生活が描かれているのであるが、よく見るとその生活に対する姿勢が単純なものではないことに気づかされる。

例えば、前節に挙げた「和劉柴桑」詩では、農村での新たな生活を始める様子が描かれているが、末尾に「耕織其の用に称ふ、此れを過ぎては奚の須つ所ぞ。去り去りて百年の外、身名共に翳如たらん」とあり、楽しい生活を満喫する自分はやがて消えてゆくこと、その限られた時間の中でささやかな生活に満足することが述べられている。この点から陶淵明和詩の独自性を追ってみよう。

太康期の文学作品では、人生がやがて尽きるべきものであるという意識が隱遁への願望と深く結びついている。

- 1 吏道何其迫 吏道何ぞ其れ迫れる
- 2 窘然坐自拘 窘然として坐して自ら拘はる
- 3 纓綏爲徽纆 纓綏徽纆と爲り
- 4 文憲焉可踰 文憲焉んぞ踰ゆべけん
- 5 恬曠苦不足 恬曠苦だ足らず
- 6 煩促每有餘 煩促毎に餘り有り
- 7 良朋貽新詩 良朋新詩を貽り
- 8 示我以遊娛 我に示すに遊娛を以てす
- 9 穆如灑清風 穆として清風に灑はるるが如く

陶淵明の和詩について

10 奥若春華敷 奥として春華の敷けるが若し

11 自昔同寮采 昔自り寮采を同じくし

12 於今比園廬 今に於ては園廬を比ぶ

13 衰夕近辱殆 衰夕辱と殆とに近し

14 庶幾並懸輿 庶幾はくは並に輿を懸けんことを

15 散髮重陰下 髪を散らす 重陰の下

16 抱杖臨清渠 杖を抱きて清渠に臨まん

17 屬耳聽鶯鳴 耳を属けて鶯鳴を聴き

18 流目翫儵魚 目を流して儵魚を翫めん

19 從容養餘日 從容として餘日を養ひ

20 取樂於桑榆 樂しみを桑榆に取らん

この詩では第13、14句「衰夕辱と殆とに近し、庶幾はくは並に輿を懸けんことを」に注目したい。これは『老子』の「故に足るを知れば辱められず、止まるを知れば殆ふからず、以て長久なるべし（故知足不辱、知止不殆、可以長久）」（第四十四章）を踏まえた「止足」の態度を述べたものである。重要なことは、後句が退官を意味する発言であることから解るように、張華は恥や危険を被るまえに、今までの官位に満足して隠退をしようと言っているのであつて、農村でのささやかな生活に満足する陶淵明とは満足の対象が異なるという点である。

その後は隱遁生活の空想が綴られる。髪をほどいて木陰に憩い、杖を手にして清流に臨み、鶯のさえずりや川魚の姿を楽しむ。そのような余生を過ごし、晩年を楽しみたい、と。確かに、この詩は人生がやがて尽きるという意識のもとに詠じられてはいる。しかし、この詩における隱遁生活は残り少ない余生を彩るものとして位置づけられているのであつて、その生活をも一時のものとする陶淵明のような捉え方は見受けられない。

また、潘岳「閑居賦」序（『文選』卷十六）には、「是に於て止足の分を覽、浮雲の志を庶ひ、室を築き樹を種え、逍遙し自得す（於是覽止足之分、庶浮雲之志、築室種樹、逍遙自得）」と、「止足」の語が直接に出てくる。こ

こどもやはり、官界において満足すべき限界をわきまえるという意味で「止足の分」と言っているのであつて、その結果として帰隱することが述べられている。

同じく潘岳の「秋興賦」では、張華の場合と同様に自身の老いを意識した述懐が見える。

宵耿介而不寐兮、獨展轉於華省。悟時歲之遒盡兮、慨俛首而自省。斑鬢彫以承弁兮、素髮颺以垂領。

宵耿介として寐ねられず、独り華省に展転す。時歳の遒り尽くるを悟り、慨として首を俛れて自ら省みる。斑鬢彫れて以て弁を承け、素髮颺として領に垂る。

(潘岳「秋興賦」『文選』卷十三)

役所の中で眠れない夜を過ごす。人生が尽き果てようとしていることを意識して、うなだれて我が身を顧みる。冠の下のかかる髪も白くなるほどに年老いた。そこで潘岳は官界に見切りをつける。

且斂衽以歸來兮、忽投紱以高厲、耕東臯之沃壤兮、輸黍稷之餘稅。泉涌湍於石間兮、菊揚芳於崖澁。澡秋水之

涓涓兮、玩游篠之澈澈。逍遙乎山川之阿、放曠乎人間之世。優哉游哉、聊以卒歲。

且く衽を斂めて以て帰り来り、忽ち紱を投じて以て高く厲り、東臯の沃壤に耕し、黍稷の餘税を輸さん。泉は湍を石間に涌し、菊は芳を崖澁に揚ぐ。秋水の涓涓たるに澡ぎ、游篠の澈澈たるを玩ばん。山川の阿に逍遙して、人間の世に放曠せん。優なるかな游なるかな、聊か以て歳を卒へん。

(同右)

襟を正して故郷へ帰ろう、官位を捨てて誇り高く生きよう。このように宣言して彼は帰隱を果たし、悠閑な生活の中で生涯を終えることを希求するのである。

もちろん、隠遁したとしても時間は流れ続け、自らの死とともにその生活は終焉を迎える。それは自明のことである。太康期の人々も帰隱後の生活を永遠のものとして捉えているわけではないであろう。ただ、老いの意識から隠遁を志向する一方で、意外にも隠遁した後の時間の流れについてはさほど関心が払われていないのである。

次に陶淵明の和詩を振り返ってみよう。

前掲の「和劉柴桑」詩における「耕織其の用に称ふ、此れを過ぎては奚の須つ所ぞ」という態度も、『老子』に言うところの「足るを知る」に近いと思われるが、張華の詩や潘岳「閑居賦」序の例と異なり、語句の襲用は見られない。したがって、『老子』からの影響というよりも、むしろ次に続く「去り去りて百年の外、身名同に翳如た

らん」、すなわち人生百年を過ぎてしまえば、肉体も名声も消え去ってしまう、という時間に対する認識に支えられていると考へたい。いづれ消え去る身であるからこそ、ささやかな生活で充分なのである。

本稿第二節に挙げた「和郭主簿」二首其一詩は、陶淵明の生活の中でも、特に幸福な日々を描いた作品としてしばしば紹介される。菜園の蔬菜や昨年收穫した穀物、さらにはそれから作り出される酒、そしてそばに居る幼子と過ぐす喜びが語られた詩である。このような詩においてさえも、第9く10句「己れを営むは良に極り有り、足るに過ぐるは歎むる所に非ず」とあるように、自身や家族が食べてゆければ充分であり、それを過剰に超えることは望まないとする言葉が見受けられるのである。これもまたささやかな生活に満足するものであつて、「和劉柴桑」詩に近いと見てよいであらう。

同じく第二節前掲の「五月旦作和戴主簿」詩においては、末聯「即事如し已に高くんば、何ぞ必ずしも華嵩に升らん」が注目される。「即事」は目の前のありのままの意であるが、ここでは第5く8句に展開されていた情景「明両時物に萃まり、北林栄え且つ豊かなり。神淵時雨を写ぎ、晨色景風を奏す」を含むであらう。それは流れゆく時間の中では一瞬の輝きに過ぎないものである。しかし、もしもそのありのままこそが価値あるものであるならば、永遠の生を目指す必要はないのではないか。作者自身を含め、全ては儚い存在であるが、その有限性を認めることによって、日常の風景さえもが価値あるものとして映るのである。

これらの詩において、隠遁生活が楽しみ味わうべき円満な世界であることは間違いない。しかし、その生活あるいはそれを営む自己は、永遠不変のものではなく有限のものである。したがって、その楽しさは無限に享受しうるものではない。このように屈折した捉え方は、従来の隠遁を描いた作品には見られない特徴である。そして、彼は屈折を加えることによって、却って生活の細かな機微までも描き出し、そこで得られる精神の安定を語った。それが、隠遁の世界を原詩作者へとフィードバックする陶淵明の新機軸であつたのであらう。

四、陶淵明和詩の共通点

ところで、有限ということに着目すると、次のような和詩との共通点も見えてくる。

- 1 市朝懷舊人 市朝旧人を懷いだましめ
- 2 驟驥感悲泉 驟驥悲泉に感ず
- 3 明旦非今日 明旦今日に非ず
- 4 歲暮余何言 歲暮余おれ何をか言はん
- 5 素顏斂光潤 素顏光潤を斂おさめ
- 6 白髮一已繁 白髮一に已に繁し
- 7 闊哉秦穆談 闊なる哉秦穆の談
- 8 旅力豈未憊 旅力豈に未だ憊うしなはざらんや
- 9 向夕長風起 夕に向ひて長風起こり
- 10 寒雲沒西山 寒雲西山に没す
- 11 冽冽氣遂嚴 冽冽として氣遂に嚴しく
- 12 紛紛飛鳥還 紛紛として飛鳥還る
- 13 民生鮮長在 民生長く在ること鮮すくなし
- 14 矧伊愁苦纏 矧いはんや伊れ愁苦の纏まつはるをや
- 15 屢闕清酤至 屢しばしばしは清酤の至るを闕かき
- 16 無以樂當年 以て当年を樂しましむる無し
- 17 窮通靡攸慮 窮通慮る攸ことごとく靡く
- 18 顓頊由化遷 顓頊化に由りて遷る
- 19 撫己有深懷 己おのれを撫して深懷有り

陶淵明の和詩について

20 履運増慨然 運を履みて慨然を増す

〔歳暮和張常侍〕詩

この詩は全体にわたって沈鬱な雰囲気包まれ、これまで見てきた詩とは異質なものを感じる。詩の冒頭から、作者は、時の流れとともに老いてゆく自己を見つめ続ける。夕暮れの陰惨な情景は、同時にいやおうなく人生の暮れをも意識させるであろう。そのため、第13、14句「民生長く在ること鮮し、短くや伊れ愁苦の纏るをや」と、人生は有限であるという眩きが発せられる。

これに続く「屢しば清酤の至るを闕き、以て当年を楽しましむる無し」の句は、『列子』を踏まえている。⁽¹⁾

凡生之難遇而死之易及。以難遇之生、俟易及之死。可孰念哉。……爲欲盡一生之歡、窮當年之樂、唯患腹溢而不得恣口之飲、力憊而不得肆情於色。

凡そ生は遇ひ難くして死は及び易し。遇ひ難きの生を以て、及び易きの死を俟つ。孰つら念ふべきかな。……

一生の歡びを尽くし、当年の樂しみを窮めんと欲するが為に、唯だ腹の溢れて口の飲むを恣にするを得ず、力の憊れて情を色に肆にするを得ざるを患ふ。⁽²⁾

得がたい生でありながら、すぐにやってくる死を待たなければならぬ。『列子』では、その貴重な生を味わい尽くすための快樂として「飲」「色」が挙げられている。

『列子』の場合はいささか享樂主義的ではあるが、この詩においても、酒はやがて尽きる人生に対するせめてもの慰めなのである。ただ残念なことに、作者はしばしば酒にも事欠くありさまであるという。

それでも、作者は心の平静を保とうとする。「窮通慮る攸靡く」とは、順境や逆境（＝窮通）に心を動かされまいとすることを述べるものである。また、後句「顛顚化に由りて遷る」は、変化のままに任せようと述べるものであつて、老いや死を受け入れようとする言葉である。しかし、従容と受け入れることができるわけではなく、年老いた自分やこれまで過ごしてきた時間を振り返り、複雑な感懷にとらわれてしまうことを述べる。

以上のように、この詩は老いとの向き合い方が二転三転する。それは自身が有限の存在であるとする意識と、それでも心の安定を保とうとする意識との葛藤によるものであるが、その揺れ動く心理を丁寧描いている。

1 蕤賓五月中 蕤賓五月に中り

- 2 清朝起南颶起こる
- 3 不駛亦不遲駛からず 亦た遅からず
- 4 飄飄吹我衣飄飄として我が衣を吹く
- 5 重雲蔽白日重雲白日を蔽ひ
- 6 閒雨紛紛微微閒雨紛として微微たり
- 7 流目視西園目を流して西園を視れば
- 8 燁燁榮紫葵燁燁として紫葵榮ゆ
- 9 於今甚可愛今に於て甚だ愛すべし
- 10 當奈行復衰當た行ゆく復た衰ふるを奈せん
- 11 感物願及時物に感じて時に及ばんと願ひ
- 12 每憾靡所揮毎に憾む揮ふ所靡きを
- 13 悠悠待秋稼悠悠として秋稼を待つは
- 14 寥落將賒遲寥落として將に賒遅ならんとす
- 15 逸想不可淹逸想淹むべからず
- 16 猖狂獨長悲猖狂獨り長く悲しむ

この詩について、岡村繁『陶淵明 世俗と超俗』（一九七四年、日本放送出版協会。176〜177頁）では暗に酒を要求する詩であると指摘されている。これもコミュニケーションのひとつの形であり、忽視できない指摘である。

夏五月の心地よい風が吹き、雨上がりの菜園には葵の花が咲き誇っている。葵は食用であるが、この詩では觀賞物と考えてよい。葵の花は、「今」この時こそ愛するべきものであるが、残念なことに酒がない。悠々と秋の收穫やそこからの酒造りを待っているのは、折角の花も枯れてしまおう。このように、限られた楽しむべき時間がすぐに過ぎ去るものであると述べることによって、より切実に酒を要求する訴えになっているのである。

なお、この苦悩は解決可能という点で、田園詩における苦悩とは性質が異なる。辛い農耕に従事することは生き

ている限り続くものであるが、この詩の場合、胡西曹や顧賊曹が酒を持参すれば、たちまち解決するのである。

1 和澤周三春 和沢三春に周く

2 清涼素秋節 清涼たり素秋の節

3 露凝無游氛 露凝りて游氛無く

4 天高肅景澈 天高くして肅景澈す

5 陵岑聳逸峯 陵岑逸峯聳え

6 遙瞻皆奇絶 遙かに瞻れば皆な奇絶なり

7 芳菊開林耀 芳菊林を開きて耀き

8 青松冠巖列 青松巖に冠して列ぶ

9 懷此貞秀姿 懷ふ此の貞秀の姿

10 卓爲霜下傑 卓として霜下の傑たるを

11 銜觴念幽人 觴を銜みて幽人を念ふ

12 千載撫爾訣 千載爾が訣を撫す

13 檢素不獲展 檢素展ぶるを獲ず

14 厭厭竟良月 厭厭として良月を竟ふ

〔和郭主簿〕二首其二詩

前掲の「和郭主簿」二首其一詩は夏の詩であつたが、其二詩は秋の情景を描いたものである。うるおいのある春とはまた違つて、今はすがすがしい秋。露が降りてほこりも立たず、空は高く空気も澄んでいる。なだらかな丘やそびえる山の峰を眺めれば、いづれも素晴らしい景色である。菊は林の中に咲き、松は岩の上にならび立つ。その何ものにも負けない美しい姿こそ、他にぬきでた山の中の傑物である。ここで作者はそんな人物（幽人）＝郭主簿を連想する。酒を飲みながら「幽人」を思い、いつまでもその言葉を味わいたいと願う。しかし、その書簡はなかなか手に入れて広げることができず、静かにこの秋の日々を過ごしていると述べる。結句の「良月」は十月を指すが、それは詩の冒頭に描かれているすがすがしい季節に他ならない。しかし、作者は書簡を待ちながら

なくして過しているものであって、やはり限られた時間を提示することで切実な思いを強調しているのである。

これらの詩においても、前の三首の和詩と同様に、有限の生活・有限の自己という時間に対する意識が取り入れられており、それによって作者の心の動きが鮮明に描き出されていると言えよう。和詩は、その制作状況を考えれば、原詩との個別の関係の中から生み出されたもののはずであるが、にもかかわらず、以上のような共通点を指摘することができる。そこにこそ、陶淵明の和詩制作における基本的態度が窺われるのである。

農村に生活する立場から「生きること」を描いた田園詩と異なり、隠遁に憧れる官僚との交際の中では、農耕の不安や苦勞などは描けなかったであろう。贈答詩に見えるように、彼の生活はあくまでも楽しい思い出として官僚と共有されるものであった。隠遁を共通の理想として語る風潮に、陶淵明も隠者の立場から参加したのである。顔延之「陶徵士誄」(『文選』卷五十七)には、「衆に違へば尤^よを速き、風に迂^{まが}へば先づ蹙^{しぼ}づく(違衆速尤、迂風先蹙)」という言葉が残されている。四言の韻文にアレンジされているが、顔延之との会話の中でこのような趣旨のことが陶淵明の口から発せられたのであろう。隠者としての彼は協調性を重んじる慎重な側面を持っていた。

和詩がこのような協調性の産物であるとすれば、陶淵明の独自性はどこに見出せるであろうか。それは、過ぎゆく時間を敏感に意識し、永遠ならざる自己を描いた点である。人はいつかこの世界から去るという悲しい法則が隠遁生活の内部においても働くということに、従来の作品は無関心であった。陶淵明は違う。「陶徵士誄」では先の言葉の後に「身才は実^みに非ず、榮聲は歇^やむ有り(身才非實、榮聲有歇)」という発言が続く。彼は有限の生活・有限の自己という意識から出発することによって、ささやかな生活への満足や季節ごとの風景の美しさをより深く語り、また一方で、そうした生活を彩るはずの書簡や酒が手に入らない焦燥をより切実に訴えたのである。言うまでもなく人生の無常は古来から詠じられてきたものであるが、これが隠遁生活を描く詩の中に取り入れられたとき、その機微をこまやかに語る新しい表現となったのである。筆者は、この点が隠遁に憧れる人々の心を動かしたに相違ない、と考えるものである。

確かに、人生の無常を詠じることや変化に身をゆだねようという態度は、陶淵明の他の作品にも見られることであって、和詩に限定されるものではない。しかし、和詩に集中して詠じられていることも、確かな事実として認め

られるのである。陶淵明の生活と死との問題を考える上で、ひとつの手掛かりとなるように思われる。

注

- (1) 本稿では、陶澍注威煥墳校『靖節先生集』十卷（一九五六年、文学古籍刊行社）を底本とする。ただし、明らかに底本の誤りと思われるものについては、以下の諸本を参照の上、適宜改めた。汲古閣本『陶淵明集』（中国国家図書館蔵宋刻遞修本影印。二〇〇三年、北京図書館出版社）、曾集本『宋刻本陶淵明詩一卷雜文一卷』（中国国家図書館蔵南宋紹熙三年曾集刻本影印。二〇一七年、文物出版社）、湯漢注本『陶靖節先生詩註』（中国国家図書館蔵南宋淳祐元年湯漢刻本影印。二〇〇三年、北京図書館出版社）、李公煥本『箋注陶淵明集』（上海涵芬樓旧藏元刊本影印。商務印書館『四部叢刊』初編）。

- (2) 『文選』所収の作品については、『文選』（一九九四年、上海古籍出版社。初版は一九八六年。本稿では一九九四年版に拠る）を底本とする。また、『文心雕龍』は詹鍈『文心雕龍義証』（一九九九年、上海古籍出版社。初版は一九八九年。本稿では一九九九年版に拠る）を参照。

- (3) 官職については、礪波護『六朝の官職名』（興膳宏編『六朝詩人伝』二〇〇〇年、大修館書店）、嚴耕望『魏晉南北朝地方行政制度』（一九六三年、中央研究院歷史語言研究所）を参照。陶澍注に拠れば、張常侍は陶淵明の姻戚とされる張野（三五〇〜四一八）、あるいはその族子の張詮（三五九〜四二三）とされる。『蓮社高賢伝』に拠れば、ともに散騎常侍に徴されるも就かなかった、とされる。

- (4) 同書、内篇第四章第一節「和劉柴桑」と「酬劉柴桑」を参照。初出は「陶淵明『和劉柴桑』詩について」（『桜美林大学中国文学論叢』第3号、一九七二年六月）。なお、同書では、「劉柴桑」を劉遺民（三五二〜四一〇）とする解釈をとらず、名未詳の柴桑県令劉某とする。本稿もこれに従う。

- (5) 田園詩については、拙稿「陶淵明田園詩の構造——その幸福の深層にあるもの——」（中国文史研究会『中国文史論叢』第18号、二〇二二年三月）を参照。

(6) 以下に原文・訳を引用する。「這些人所写的則多半着重在隱逸生活的描述、說明這種生活是崇高的、快樂的、值得欣義的。与阮嗣宗的看法已不同了」。日本語訳は、石川忠久・松岡榮志訳「中国の文人「竹林の七賢」とその時代」(『隱逸を願う風潮について』一九九一年、大修館書店。271頁)を参照。「これらの人々〔西晋太康期の詩人・引用者注〕が書いたものは、ほとんどが隱遁生活の描写に重点が置かれ、この種の生活が崇高かつ快適で、義望に値するものだと言っており、阮籍の見方とはすでに異なっている」。

(7) 西晋までの作品と陶淵明との比較については、鄧安生「從隱逸文化解讀陶淵明」(『天津師範大学学报(社会科学版)』総154期、二〇〇一年1期)、蔣寅「陶淵明隱逸的精神史意義」(『求是學刊』第36卷5期、二〇〇九年九月)を参照。また、陶淵明と張協とを比較した一海知義「西晋の詩人張協について」(京都大学中国語学中国文学研究室『中国文学報』第7冊、一九五七年十月)では、張協における単純さと陶淵明における複雑さとが指摘されている。陶淵明以前の作品との相違点として示峻に富む指摘である。

(8) 朱謙之『老子校釈』(二〇一〇年、中華書局。新編諸子集成。初版は一九八四年。本稿では二〇一〇年版に拠る)を参照。

(9) 陶淵明の田園詩にも、「姿年逝ゆくく已に老ゆるも、其の事未だこゝ云に乖はなれず」(『丙辰歲八月中於下潁田舎穫』詩)、「総髪より孤介を抱き、奄たちまち出づ四十年」(『戊申歲六月中遇火』詩)のように老いに関する記述が見える。しかし、これらは農耕に従事してきた年月をふり返り、その生き方を肯定することにつながってゆく表現であって、和詩とは性質を異にする。

(10) 陶淵明作品における夕景が老年を意味する表現であることについては、増野弘幸「陶淵明における『夕暮れの山』の表現についての一試論」(中国文化学会『中国文化研究と教育』第64号、二〇〇六年六月)を参照。

(11) 楊伯峻『列子集釈』(二〇一〇年、中華書局。新編諸子集成。初版は一九七九年。本稿では二〇一〇年版に拠る)を参照。

(12) 『齊民要術』卷三「種葵」に拠れば、五月には春葵はすでにしおれ、秋葵は六月に播くため、その中間の五月初に採種の葵を播くとされている。恐らく、その花を觀賞するのであろう。

陶淵明の和詩について

(13) 本稿では、朱自清「陶詩的深度——評古直『陶靖節詩箋定本』(層氷堂五種之三)」(『朱自清古典文学論文集』下冊、一九八一年、上海古籍出版社)の所説に従い、「檢素」を書簡と解釈する。なお、「檢」は宛先を記す木簡の意。このことについては、富谷至『文書行政の漢帝国 木簡・竹簡の時代』(二〇一〇年、名古屋大学出版会。55頁)を参照。

【お詫びと訂正】本誌第51号に掲載の拙稿「陶淵明『帰園田居』五首における住居について——『方宅十余畝、草屋六七間』句を中心に——」の副題および本文に「六七間」とあるのは誤りです。全て「八九間」に訂正致します。筆者の確認不足による誤りであり、一切の責任は筆者にあります。深くお詫び申し上げます。